

研究開発成果実装支援プログラム 評価報告書

平成 24 年 4 月 2 日

研究開発成果実装支援プログラム PO・AD 委員会

課題

名称：津波災害総合シナリオ・シミュレータを活用した津波防災啓発活動の全国拠点整備

期間：平成 20 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日（東日本大震災対応のため 1 年間延長）

実装責任者：群馬大学大学院工学研究科社会環境デザイン工学専攻 教授 片田 敏孝*

*平成 23 年 3 月 31 日までは株式会社アイ・ディー・エー社会技術研究所で実施

1. 総合評価

当初に期待された水準を大きく上回る成果が得られたと評価された。防災・減災という成果を見せにくい領域において、可視化や具体的な現場の育成・指導を着実に積み重ねられたことが、残念ながら東日本大震災という事態を通じてではあれ、高い効果を実証することにつながっており、社会実装の意義を示せる重要な事例となった。シミュレータの開発成果を、地域に展開し、取組を受け入れて協力してくれる自治体を見つけるところから努力を重ね、多くの講習会、説明会を実施、実装に至った。その結果、東日本大震災による事例として、本シミュレータを活用した津波防災対策を実践していた釜石市の様子などがマスコミでも多く取り上げられ、この取組による成果が「釜石の奇跡」として注目され、全国的に関心が高まった。また、チリ地震津波、東日本大震災に関するアンケート調査結果も広く知られるところである。実装地域である釜石市でたくさんの小学生の命を救ったことが何より大きな実装の成果であると考えられる。津波被害の可能性のある地域において、本プロジェクトの方式がよりいっそう拡大し、津波避難の国際的標準となることを期待したい。

2. 各項目評価

(ア) 実装支援の目標の達成状況

当初の目標を超えて達成されたと評価された。津波防災において、ハザードマップを作成し、3 地域において、社会実装を実施した。ソフトの充実に加え、子供版も準備し、シナリオ・アプローチにより、被害最小化の貴重な基盤が実現できている。特に、東日本大震災に起因する津波発生時にその成果が発揮できたことは、社会技術の実装の点で、嚆矢に値する。チリ地震津波や東日本大震災の発生により、目標を超える成果が見られ、非常に高い関心を集めた。また、当初の予定対象地域での実装とならなかったケースもあるが、現状に即した形で対象地域を変更し、より多くの成果を得ている。これらのことから、社会実装において、とりわけ、予防に取り組む領域や事例については、導入しやすさより、社会課題（事象）発生時の影

響の大きさ（重要性）と緊急性の高さについて、より踏み込んだ評価を行う必要があると考えられる。

(イ) 実装支援終了後の実装の継続及び発展の可能性

大いに可能性ありと評価された。実装活動中は、必ずしも積極的に本シミュレータを活用した津波防災対策を実行していこうという姿勢が見られなかった地域もあったが、東日本大震災発生以後は、各自治体で予算を用意して、津波防災対策をすすめていきたいとの要望もでてきている。東日本大震災によって関心が高まり、また、実効性の高さも立証されたことから、実装の継続・発展は不安なく進むことが期待される。釜石の実績に刺激されて他の地域への波及が進むことは確実であろう。実装支援期間中に起きた東日本大震災によって、これまでの成果が検証され、更なるニーズが生じている。些か懸念されることとしては、今後の事業を実装活動実施主体であった（株）アイ・ディー・エーが継いでいくのか、シミュレータをさらに高度化させる研究を大学で継続できるのかという点だろう。片田教授には、この事業の普及について、より効果的に進めるための教育・導入支援体系の整備を期待したい。

(ウ) 組織体制は適正であったか

適正であったと評価された。群馬大学災害社会工学研究室と（株）アイ・ディー・エーがよく連携して、実装活動を推進することができた。また、市民組織、地方自治体との関係を強化したことは社会技術研究開発の効果的な進め方のひな形を示した。今後の加速的な普及に向けた教育・導入支援体制づくりという観点からは、改善の余地があると考えられる。

3. その他特記事項

3.11 東日本大震災の発生により、本シミュレータを活用した津波防災対策を実践してきた先行地域である岩手県釜石市が甚大な被害を受けた。そのなかで、釜石市が継続的に実施してきた津波防災教育によって、小中学生が救われたという、大きな成果が確認された。予期せぬ大災害の発生ではあったが、このことにより、本シミュレータを活用した津波防災対策の有効性は広く全国に周知されることになったものと考えられる。また、実装期間の延長によって、そのような成果を計測するための調査も被災後間もなく実施することができ、その結果を公表することができたことも、このようにマスコミが大々的に取り上げた理由であると考えられる。今後、片田プロジェクトを、それぞれが自らの問題として、主体的に取り組めるような枠組みがほしい。

以上